

二十四 今この国で — 或るまちづくり協議会設立總會

この国で、大都市を除けば、地方の衰微はもはや隠しようがない。政府・中央官庁が、手をこまねいているわけにもいかず、ようやく対策を模索し始めて、「地方創生」というスローガンを唱えている。合併前の市と三町とで一九八〇年代に合わせて五万人を超えていたわが市は、数年前に人口が四万人をきってさらに減少しているが、市役所が「地方創生」に関連する事業計画を立てて、いくつかの地区で「まちづくり協議会」の設立を指導した。わたしの暮している集落でもまちづくり協議会ができて、衰微のただなかにある当の地方で起きている反応を見つつある。その実情を記すことは、二〇一五年この国がどういう状況にあるか、コミュニティと人々の行動パターンがどんなものかについて、一つのレポートになるだろうと考えるので、この雑記帳に収録する。

暮れのある日、顔見知りの人ややってきた。市から助成金が支給されて、この地区にまちづくり協議会ができることになった、ついでには監事になってほしいという依頼である。渡されたちらしは、門松と「寿」の文字の挿絵を添えた青い良質のA4用紙一枚。一月吉

日づけで、設立の準備が済んだことを報告し、日時を告げて設立総会の案内をするものだ。裏には正副会長・理事・評議員などの役員名簿も印刷されている。もう全部がお膳立てされている。この集落は、行政末端組織である三つの「自治会」に分かれている。その三つの自治会が合同して、市から助成金を受けてまちづくり協議会を設立するのである。すでに市内に五つか六つのまちづくり協議会があるというが、複数の自治会が昔からまとまりのある集落を成していることは、認定されやすかったと考えられる。税金を使つてのまちづくり活動である。わたしは、責任が発生しますねと答えておいた。

年が改まると、先日渡されたちらしが各戸に配られた。土曜日の五時半、その設立総会の開かれる集落の公民館に出かけた。正面に議長席が置かれ、左手の長テーブルに、正副会長である三人の自治会長、続いて事務局長と会計がネクタイ姿で腰かけている。右手の長テーブルに、市長・市議会議長とこのまちづくり協議会の顧問三人、続いて市役所の担当部署の三人とこの地区に住む三人の市の職員。顧問は、昔からの集落共同体の総代とこの地区出の市会議員である。広い板の間中央に平テーブルが並べられ、ほかの出席者はこの座布団に座る。うしろの方の低い椅子に座る人もいる。三百数十戸の地区から出席者が全部で七十人ぐらいたったとあとで聞いた。市内の週刊新聞社が取材に来ている。

配られた冊子に印刷された「次第」の順に会議が始まる。来賓の市長・議長の挨拶があ

り、発起人代表である会長が設立趣意書を説明。特筆すべきほどのことは語られなかったと思う。議長は会長が務める決まりらしい。事務局長が、役員名簿案に印刷された四十人の名を紹介し、続いて規約案を読み上げた。突然見せられた条文がうまくできているかどうかをすぐに判読するのは誰にもむずかしい。理事を出して協議会を構成する団体や組織の表も紹介された。このまちづくり協議会がどんなことをするのか、三か月の本年度行事計画表が示される。それを見ると、大急ぎで計画表がつけられたことが分かる。独自のまちづくり活動は、三月に環境部会の活動として、この公民館周辺の除草作業と海岸清掃の二つ。十一月中旬に設立の話が始まったのだとしたら、まあ、これはしかたのないことではある。しかし、市が年度予算を使うのにこんな遅く話を開始した点は、大いに問題である。中央政府が補正予算をあわただしく組んだせいだろうか。

説明の進むあいだ予算書を見て驚いた。市からの補助金は、集落機能再生事業設立補助金十万円、集落機能再生事業モデル事業補助金三十五万六千円。支出で、会長・団体名の印鑑代・出納簿と消耗品費の一万円余りは、協議会発足の必要経費と言えるだろう。最大の支出は、パソコン十万円、プリンター二万円、パイプ椅子十二万円の備品購入費。次に、会議費が十三万円近く。肝心の事業費は七万四千円。出来たばかりとはいえ、支出のバランスはよくない。詳細を見るとはつきりする。会議費は、設立総会冊子印刷代を除いて、

すべて弁当代とお茶代である。設立準備会に弁当三十三個、設立総会に弁当八十個、合計およそ十二万円。さらに、事業費もすべて弁当代とお茶代である。徘徊模擬訓練参加者に配るのに六十人分、六万円が計上されている。独自の二つの活動、公民館周辺の除草作業と海岸清掃には、それぞれ参加者七十人分のお茶代が合わせて一万四千元だけ。これでは「まちづくり」の活動費だと公開するのがうしろめたい。

予算書の説明が終わったら、議事全部についての質疑応答の時間になった。質問があつて、「除草作業は毎年三回ほど自治会でやっているが別にもう一回やるのか」の問いに、答弁は、「まちがきれいになるのはよいことですから」。わが家では、畑でないところの草取りを三月一日にはまだしない。この事業は形をつくらうためのものようだ。年間行事計画表にも予算書にも、まちづくりの熱意は感じられず、アイディアを出そうとする気配がない。しばらく間をとつてみたが、このままでは、一つきりの質問で設立総会は終わってしまう。挙手して発言した。全国にまちづくり協議会がつくられ、なかには先進的な取り組みがあるかもしれない、それは参考になるだろうから、市役所の担当部署や事務局長などの人たちはぜひそういう情報を集めてほしい、と。ほかに発言はなく、議長が会議を終わらせようとする気配。もう一度挙手して意見を言った。

じつは、冬の五時半という時間設定をいぶかったが、つれあいには弁当が出るのではないかと言った。わたしはまちづくり協議会でそんなことはしないだろうと答えて家を出て来たのである。監事として予算書に疑問を呈するのが責務だと思う。言わなければならぬ。……ほぼ弁当につきる会議費十二万円はおかしいと思う。まちづくりをしようとする会議なら、手弁当で集まるぐらいでなければいけないだろう。まして、活動費四十五万円余りは市の公金から出るのである。わたしは監事をおおせつかって責任を感じているが、協議会はもっと使い道を考えるべきだ。(市長の方を見ながら市長さんも税金の有効な使用を望んでおられるはずだ……。話し言葉ではもう少し長くしゃべっただろう。

本当は、備品購入費だっておかしい。今の世の中である。年にせいぜい二度か三度しか開かないつもりで理事会・総会などの印刷物をつくる。パソコンぐらいは融通できる。現に、三つの自治会の回覧や集落の初寄合の資料なども印刷しているのである。主な事業費を徘徊模範訓練の弁当代に費やすのもおかしい。これは第四回となっているから、支所の公民館あたりが毎年の定例行事として行なうもので、それをこの集落で開いて、このまちづくり協議会が支出するのだ。市役所が案出したお手盛り予算と言われても仕方がない。

監事がもっと厳しく疑問を突きつけたら、設立総会は混乱したことだろう。しかし、その一員でもある小さな共同体がとにかく前向きの活動を始めようとするのを立ち往生さ

せるわけにはいかない。全体の議事を承認する運びになった。わたしはもちろん賛成できないが、はじめ積極的に賛成する人も少なかった。役員側が促してやっと採決された。会議が終わると、出席していた市の担当部署の一人が、弁当代についてはわたしもおかしいと思っていた、よく言ってくれた、と声をかけてきた。もう一人評議員になっている人がやってきて、「君の言うとおりだ。これでは、お役所仕事と同じ予算消化ではないか、こういう話になっているのを知っていたか、評議員の自分も全然知らなかった」と言う。協議会の運営もまだしっかりしていないのだ。

帰り際、顔見知りの理事の一人に苦情を言いながら、仕方なく弁当を受けとる。共同体の一員としてこの不始末に加担するのである。まちづくり協議会のできていない地区の市民に文句を言われたら申し開きはできない。

気がかりだから、後日、総会資料と規約に目を通してみた。組織図を見ると、理事会の下に、文化体育部会・子ども支援部会・地域福祉部会・健康部会・環境美化部会・安心安全部会の六部会が置かれている。その部会長は評議員だが、実際の活動はこの六つの部会が担うようだ。この組織の仕方は役所の行政組織と相似で、基本的に市がすでにつくっている委員や組織をもとにしたものだと考えられる。すると、まちづくり協議会は、市の行

政の外延的な下請けとしてある。すでにある活動以上に何をするつもりなのだろう。

規約自体がそういう考え方で書かれているように見える。理事会の上にある総会についてほとんど説明しない。条文中、まちづくり協議会は、おおよそ正副会長・理事会と六部会で構成されているように読め、誰に責任を負うのかあいまいなままの執行機関のようだ。年に一度だけの総会で予算・決算を審議するとあるから、どういう活動をするか十分意見を募ることもできないまま、正副会長と理事会で予算案を決めることになるだろう。実際の事業は部会に丸投げとなるだろう。全体として不備な規約条文だと思う。

別の日、協議会の役員になっている数人と話をする機会があった。その言い分を聞けば、当事者たちも困ったのだと分かる。全体が市役所主導で行なわれたのである。だから、住民の主体的な活動と言いながら、従来の行政の延長上で組織されたのだ。市役所の担当者は、お金をどんな使い方をしてもよいと言ったという。ほかのまちづくり協議会でも、大半を占める弁当代に住民から疑問が出されたそうだ。市役所の担当部署の中にも弁当代に疑問をもつ人がいるのに、こういうことが起きたのは、市役所が文字通り拙速に事を運んだせいだと考えられる。ところが、集落の初寄合の世話人は、弁当代でも出さなければ参加者はずっと減るだろうと言う。つまるところ、コミュニティの活動は気運に欠けているのである。さらに聞けば、まちづくり協議会に補助金が出るだけでなく、対応する市役所の

事業にも追加的な予算を出すらしい。細分化され重複するお金の出し方からすると、市役所は、政府から与えられた予算の消化にあわてて勉強しているのだろう。

この市だけがこうなのだろうか。そうあってほしいものだ。しかし、わたしたちの市の市長・市役所職員・住民が、ほかの市よりも極端に劣るとも考えにくい。政府の地方創生のスローガンの下、全国で大なり小なり似たようなことが起きているのではないか。今回の出来事を見れば、政府の政策の効果に大いに疑問を抱かざるをえない。地方創生事業は、地方での具体的な施策を想定することもなく実施されているのだ。きれいごとの作文だけで事が進むはずがない。実効ある地道な活動は数えるほどしかないのではないだろうか。地方行政組織が急に施策を立案するのはたいへんむずかしいのである。現在の経済状況を受けとめて、国民の借金を増やすパフォーマンスではなく、苦しいが可能な現実的対策を試行錯誤するしかないだろうと思う。ひよっとしたら、地元に戻る大学生への奨学金給付や、農水産業維持の補助金など、直接の資金注入の方が効果があるかもしれない。

ところで最近、講談社の小冊子『本』に連載されている平田オリザの「下り坂をそろそろと下る」という小文を読んでいる。その表題は日本の状況を反映している。才能豊かな人は、地方に向いて演劇家の立場から文化・教育分野の活性化に働いている。二月号で

は、地方創生政策に関連することに触れている。出向いたところの首長と談話することが多く、しばしば「何かアイディアは？」と訊かれるらしい。むしろ活動的な首長たちが今もアイディアを求めているのは、本当に実効ある施策が十分できていないと感じているからではないだろうか。それに対して平田は、もう出来ることはたいいていやっているのだと思う、と書いている。才ある人でも、自身の活動以上に新しいアイディアは出せないだろう。さまざまな分野で、平田オリザのような人が出現しなければいけないのだ、それも地元の人間の中から。それほど現在の状況下で地方再興は困難だということだ。各人が直接かかわる経済や社会の活動の中で、コミュニティを大切にしながら、行動を工夫することから始めるしかない、と思う。

いつのまにか虚勢を張っていつぱしの者のような口ぶりになった。正直なところ、陶淵明を慕う拙なる者に実家の才覚はない。すぐに実行できるアイディアを思いつかない。それでも、わがコミュニティに出来たまちづくり協議会の一員として、何かをしなければならぬと思う。無い知恵をどうしぼり出せばよいか。

それにしても、人々のようすはのんきに見える。自分のかかわる場の外にまで関心を広げて全体に大きな疑問を感じるものがなければ、それなりに活動する人間は持ち場での行

動を肯定的に評価することになる。しかし、全般的な制度が疲労して運営もうまくいって
いなくて、よい方針が出せず、生産的な行動を担う人も少ないとき、つまり国家の体制に
問題があるとき、多少の活動があつたとしても、全体的な結果はひどいものになるだろう。
わたしは、この国が江戸幕府倒壊の前のような危機的な状態にあるのだと思う。
それが杞憂になることを願う。